

明治大学

ラテン

アメリカ

研究

ノート

私たちがラテンアメリカから学べることは何なのか。それはこの地域が、民族的にも文化的にもきわめて多様でありながら、多文化間の調整において他のどこよりもすぐれていることにかかわっています。そこにはまた、世界の中心の近くにありながらもそこから外れた辺境であり続けている場所ならではの、意識の二重性という洗練があります。そのような複雑な豊かさを複数の観点から描き出してお見せしたいと思います。

「ラテンアメリカ・フォーラム」コーディネーター 巨敬介

内田兆史 UCHIDA Akifumi

街に刻まれる記憶

1996年、ブエノスアイレス市議会は、没後10年となった20世紀アルゼンチンを代表する作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスの名前を、彼が幼少期を過ごした家があった通りにつけることを決定します。彼の作品にも人生にも大きな影響を及ぼしたこのパレルモ区の街路を、学生だった私をはじめ訪れたのは1993年のことで、その際にはまた往事と同じくセラーノ通りという名前でした。1999年、ボルヘスの生誕100年に合わせてふたたびブエノスアイレスを訪れ、この通りを歩いているとき、通りが本人の名前になっていることに気づき、驚いたと同時に憤慨したことを覚えています。というのもそれが、生前「私は通りの名前になどなりたくない」と言っていたボルヘスへの裏切りのように感じたからです。加えて、初期の代表作のひとつである詩「ブエノスアイレスの神話的創設」には、彼にとってブエノスアイレスは、「グアテマラ、セラーノ、パラグアイ、グルチャガ」の4つの通りに囲まれた街区で生まれたのだと書かれており、セラーノ通りがホルヘ・ルイス・ボルヘス通りになるとこの詩の重要な雰囲気は損なわれてしまう、とも思いました。

新しい国であるアルゼンチン、その首都ブエノスアイレスでは通りや広場など、地名の多くに人の名前が採用されています。たしかに知らない名前のついた通りに出会うと、その由来を調べたくなり、調べるたびに歴史に触れた気になります。近年ではボルヘスの例にあるように、その土地と関係の深い人間の名前がつけられることも増えてきたようです。これも街に記憶を刻む行為なのだ、最近ではそう思うようになりました。

2013年にはやはりブエノスアイレス市議회가、地下鉄駅エントレリオ

スにロドルフォ・ウォルシュという名前を添える決定を下しています。ロドルフォ・ウォルシュは作家で、1976年にアルゼンチンで起こったクーデターによって生まれた軍事政権の実態を訴えるジャーナリストでした。政権誕生のちょうど1年後、彼は「軍事政権に宛てた一人の作家からの手紙」と名づけた文書を書き終えます。そして国内外の報道機関にそれを送るためにエントレリオス通りを歩いているところを軍人に襲撃されたのがこの駅のある街角でした。彼がその場で殺されたのか、あるいはその後連行された軍の施設で死んだのかはわかっておらず、遺体も見つかっていません。

軍事政権が倒れる83年までの7年間に、こうした「行方不明者」は3万人に及んだと言われています。反対勢力のメンバーやその家族を連行し、監禁・拷問、そして殺害していたとされる施設は全国に散らばっています。そしてロドルフォ・ウォルシュをはじめ5000人もの人々が連行されたのがブエノスアイレス市の北の外れにある元海軍工学校、略称ESMAでした。民政移管後も軍の管理下にあったこの土地は、2004年、「国家によるテロリズム」の非道さを記憶し、人権意識を高揚させるための場とする宣言がなされ、2007年に博物館として公開、現在に至っています。国家が犯した罪を街に刻んだままにしておく意義を、博物館のガイドは「二度と繰り返されないため」と説明します。軍からの接収を宣言した大統領は「これほどまでの残虐行為に対し、民主化後20年間も口を閉ざしてきた不名誉」を国家の名の下に謝罪しました。

喜ばしい記憶ですら時間とともに忘却の淵に追いやられるものであり、汚辱の歴史はしばしば忘れ去られようとし、あるいは積極的になかったものにされかねません。アルゼンチンもたとえば、先住民に対して行ってきた抑圧に対して積極的な反省を公にしているとはいえません。だからこそ、こうして記憶を刻んでいくこと、歴史に直面し記録していくことの重要性を、ブエノスアイレスの街が教えてくれている気がします。

仮屋浩子 KARIYA Hiroko

現代演劇が物語るラテンアメリカの記憶

「夢って何だい」、「記憶の無限なる光よ。」これは、アルゼンチン出身で現在はエクアドルを拠点に演劇活動をしている劇作家アリスティデス・バルガス(1954-)の作品、『オクトパス・ガーデン *Jardín de Pulpos*』の第一場にてでくる台詞です。突然記憶喪失になってしまった男ホセと、夢をとおして記憶を取り戻す手助けをしているアントニアとのやりとりです。半信半疑のホセでしたが、眠りはじめると、舞台奥で静止していた、ホセの記憶を織り成す人びとが動き始めます。最初の夢に現れるのはホセの家族です。教会の飾り衝立(レタプロ)を衣装のなかに仕込んで登場する曾祖父のレミヒオ。彼は、あまりの困窮生活から食べ物ばかりか、飾り衝立、さらには国家の歴史の本までも食してしまい、3年もの間便秘を煩った後亡くなりました。叔父のアルフレードは人魚に恋をし、自分も人魚となり海へと発ってしまいます。家族の男達がみな死んでしまい一人取り残されたホセの母親は、自分の有り余った愛情をゴミ箱に捨てるしかないと嘆いています。しかし、いつかは蘇ってくれると希望を抱き、彼女はジョウロで死者に水をやり続けるのです。

また20歳そこそこであったバルガスはアルゼンチンで起こった軍事クーデター直前、命を狙われ祖国を後にします。家族に別れを告げることもなく、突然亡命者と化してしまったそのときの彼の気持ちを誰が想像することができるのでしょうか。自分のトラウマを自叙伝的劇作品として書き下ろすようになるのは、キトに劇団「マライェルバ」を創設後10年以上経ってからの90年代のことでした。

ラテンアメリカにおいて舞台芸術は単なる娯楽ではありません。植民

地主義、政情不安を経験し、もしくはそれが現在進行形であるこの地域にとって、これまでの悲惨な出来事を忘れぬよう、記憶に留めておくために、舞台芸術が使われます。ただし真の目的は、同じような過ちをおかすことなく未来を築いていくことです。しかし、どんな惨事が起きても、時が過ぎると忘れ去られてしまっているのが現状です。事情は異なりますが、東北の大震災、福島での原発事故がいい例でしょう。当事者以外の人は何事も無かったかのように過ごしています。被災地から生まれる芸術もありますが、メインストリームの娯楽の影に隠れてしまっているようです。

ホセの記憶喪失の原因は自分の息子の死でした。夢の中で、妻と出兵間際の息子とのやりとり、そして起き上がっては倒れる息子のイメージが繰り返されるのですが、ホセは彼らのことをどうしても思い出すことができません。あまりのショックで記憶が消えてしまったからです。自分の遠い祖先である神話界の神々や人々のあいだに起きた争いを思い出す最後の夢の中で、ホセは記憶喪失の原因を知ることになるのです。

ラテンアメリカでは、ホセや彼の家族のような体験をした人々や、当事者ではなくともそのような知人をもつ人が数多くいます。だからバルガスが紡ぎ出す物語はラテンアメリカ中で共感を呼ぶのでしょう。描き出されるのは、国家の歴史に名が刻まれることのない、忘れ去られた市井の人々。彼らの記憶を呼び起こすことは、不可視化された存在を可視化し、彼らの尊厳の回復を求めることでもあるのです。ホセの母のような嘆きは、実際にペルーやコロンビアで耳にします。絶対に癒えることはないその悲しみを完全に理解することはできませんが、彼らの思いを受け止め寄り添い、バルガス氏の作品に共感を抱くことは、たとえ文化が異なっていたとしても可能だと思います。

現在、バルガスの書いた別の作品の上演をすべく、準備を進めています。女性と記憶が語られる作品です。少し滑稽で物悲しい女性たちの立ち振舞いと時間との戯れを近い将来、皆さまに是非ご覧になっていただけたら、幸いに存じます。

(政治経済学部准教授／スペイン語圏演劇)

越川芳明 KOSHIKAWA Yoshiaki

ハバナで考えたこと

ハバナのマリアナオ地区を歩いていて、とても珍しいものを見つけました。道端にそびえ立っている大樹に、ある看板がかかげられていたのです。

その大樹は「セイバ」と呼ばれる、神聖な「生命の樹」。キューバの黒人信仰の一つ「サンテリア」では「アラバ」と呼ばれ、その大樹の根元にオリチャと呼ばれる神霊たちへのお供えを捧げることになっています。たとえば、オリチャの好物の果物や食事、犠牲にした動物の死骸などです。

その場所は聖なるモノを安置した祭壇なのか、それともゴミの集積所なのか。一見してそれがわからないほどに渾然一体となっていて、非日常的な雰囲気醸し出されています。人によっては、ただのゴミ捨て場だと思っても不思議はありません。

話は少しそれますが、ずっと以前にメキシコ南部チアパスの、とあるインディオの墓地でも似たような経験をしたことがありました。

集落のはずれにある砂地の墓地で、そこには墓石は一つもなかった。盛り土の上に、あるものは白く、あるものは青く、またあるものは黒く塗られた質素な木製の小さな十字架がたっているだけでした。家族ごとに埋葬されているようで、一つの場所にいくつもの十字架が重ね合わせになっていました。白い十字架は赤ん坊の死者のため、青い十字架は若者の死者のため、黒い十字架は老人の死者のためだといいます。

誰もいない荒涼とした墓地で、風が吹くと砂けむりが起こります。ふと僕はファン・ルルフォの『ペドロ・パラモ』のあの不気味な死者の世界を思い出しました。

僕が驚いたのは、そうした舞台設定ではありません。実は、墓地のあちこちに炭酸飲料のペットボトルが散らばっていて、まるでゴミ捨て場のように汚かったのです。中身の入っていないペットボトルが風に吹かれて、

砂ほこりと一緒にカラカラと転がりました。

どうしてこの人はゴミを片づけないのだろうか。そのとき、僕は心の片隅でそう思いました。

だが、あとで僕は、このチャムーラ村でフィールドワークをおこない、『エル・チジョンの怒り』という優れた研究書を出した清水透さんに教わることになりました。

村人は死者のために敢えて片づけないのだそうです。彼らの信仰によれば、死者はコココーラやファンタなどが大好きなのです。村人のそうした信仰を、僕たちは笑うことはできません。日本人だって、仏壇に先祖のためにご飯や水をお供えするではありませんか。

そのとき、僕は気づきました。ペットボトルの散らかった墓地をゴミ捨て場のようなと思うのは、よそ者である僕の勝手な価値判断にすぎない。他者の文化に対する、一種の「オリエンタリズム」の押し付けなのだ、と。

ハバナの「生命の樹」にかかげられていた看板に話を戻しましょう。

看板には、「ここに宗教のお供えモノを捨てるのを禁じる」と、ベンキで乱暴に書かれていたのです。これには本当に驚かされました。僕は自分の目を疑いました。

サンテリアに興味を抱いてから十年近く、いろいろなところで「生命の樹」の神々しさに接してきましたが、このような不敬な看板は見たことがありませんでした。

しかも、そこは金持ちの白人の地域ではなく、むしろ黒人信仰の盛んな土地柄なのです。それなのに、先祖霊やオリチャへのお供えをゴミとしてしか認識しない人がいるとは。

粗雑な板の看板といい、乱暴なベンキの字体といい、当局のお達してないのは確かです。住民の誰かが思いついたのでしょうか。

果たして、それは「近代化」「西洋化」「キリスト教化」を押し進めようとする「進歩思想」なののでしょうか。それとも、かつて奴隷であった被抑圧者に対する「反動思想」なののでしょうか。

菅啓次郎 SUGA Keijiro

チリという宿題

チリについてできるだけ精密に思い出してみたいと思うものの、時は強力な消しゴム。輪郭も細部もぼやけたまま、光の印象ばかりが強くよみがえってきます。ブエノスアイレスから延々とパンパスを走り、バリローチェから国境を越えてプエルト・モンへ。そこで真夏のクリスマスをすごしてから鉄道でサンティアゴめざして北上しました。ふたつの国、ふたつの首都。でもその表情はずいぶんちがいます。派手好きで贅沢な印象をもつブエノスアイレスに比べて、サンティアゴはやさしくたおやか。人々の顔立ちも、圧倒的に混血顔です。アンデスの雪解け水を湛えたマポチョ川が市内を流れ、緑の多い街は美しい光にみたされ。でも同時に、そこではずっと重苦しさを感じていました。33年前のサンティアゴは、まだ戒厳令下にあったのです。

街角ごとに軽機関銃をもった兵士。夜間は外出禁止、夜はしずまりかえています。モネダ宮殿(大統領府)を通りかかると「ああ、ここか」と思うものの、立ち止まると怪しまれるのではないかと足を止めることができません。独裁者ピノチェ將軍が1973年にアジェンデ社会主義政権を転覆させたクーデタの舞台。自分の知らない恐ろしい記憶がここに刻まれていると思うだけで、街の平和な美しさとの落差が、断崖のように感じられました。

ぼくはラテンアメリカ研究者ではありませんが、不思議な巡り合わせで、その後、チリ人が書いた本を2冊、スペイン語から翻訳することになりました。『知恵の樹』(朝日出版社、1987年)と『パウラ』(国書刊行会、2003年)です。前者はマトウラーナとバレーラというふたりの「認識の生物学」者の共著で、いわゆるオートポイエーシス理論をわかりやすく解説しています。一読して魅了されたのですが、かれらの理論の背後にあるも

のがクーデタ後の知識人に対する凄惨な弾圧と社会の崩壊だったことを知り、慄然としました。政治状況が生物学理論にまで影響をおよぼすなどとは、それまで考えたことがありませんでした。

後者は自殺に追いやられたアジェンデ大統領のいとこの娘にあたる小説家イサベル・アジェンデの、娘の死をめぐる悲痛な手記。作家イサベルもまたクーデタ後の状況下でチリを離れ、以後ずっとチリの外で生きてきた人です。彼女のよろこびも悲しみも、すべてはこの流浪の生活の中にあり、極端な振幅をもった暮らしが抑制の効いた文体で綴られます。彼女が正面切って政治を論じることはほとんどないのですが、その生涯がまるごとチリの流血の現代史とともにあることは疑いの余地がありません。

そんなふうにチリを垣間みるのがつづいたあと（ただし本当に関心をもってその歴史を学ぶことのないまま）、一昨年になってパトリシオ・グスマン監督のすばらしい2本のドキュメンタリー映画が、またほくの心をチリにむかわせました。『光のノスタルジア』（2010年）と『真珠のボタン』（2015年）という2部作です。前者はアタカマ砂漠にある天文台を出発点とし、光と時をめぐる瞑想に人を誘いながら、この砂漠がピノチェ独裁政権により殺害された人々の死体を埋める土地ともなっていたことを知らせます。後者は一転して水つまりは海に焦点を合わせ、チリの歴史にひそむ先住民虐殺の記憶をたどるのですが、ついでかれらの海もまた、独裁者により殺された人々の死体捨て場になっていた事実が明らかにされます。

驚くべき多様性をもったチリの国土に、こうしてちりばめられた現代史の惨劇の痕。息を呑むほど美しい映像に載せて、しずかな口調で語られるこれらの証言により、ほくはまた1984年のサンティアゴに引き戻されたのでした。自分がかつてたしかに訪れ、でもそれ以上の関わりをもたず、けれどもこうして何度も回帰してくる、あの街の存在。それはたぶん半ばをとくに過ぎてしまったほく自身の生に対して、何者かによって与えられた、大きな宿題なのかもしれません。

武田和久 TAKEDA Kazuhisa

魂の征服と今日のキリスト教文化

今日のラテンアメリカは、貧困、麻薬、暴力、ゲリラなど、様々な不安定要因を抱えた地域として知られています。こうした問題の根源が、アメリカの「発見」(1492年)以後、スペイン・ポルトガルが300年にわたって進めた植民地政策です。当時ライバル関係にあった両国はしのぎを削りながら植民地の獲得に血まなこになり、膨大な数の非ヨーロッパ人を軍事制圧し、金銀財宝を奪い、ゆるぎない支配体制の確立を目指したのです。過酷な労働や搾取に加えてヨーロッパからもたらされた伝染病が原因で被征服者たちが次々と死んでいくと、奴隷化された大量の黒人がアフリカから連れてこられました。こうした限りない暴力は「黒い伝説」として現代に伝わっています。多くの日本人がラテンアメリカに対してよいイメージを持っていないのはこのような伝説の影響かもしれません。

しかしながら、数百年に及んだ植民地体制下のラテンアメリカにおいて独特の文化が育まれていったことも見逃してはなりません。スペイン・ポルトガルはアメリカの軍事征服と並行してキリスト教の布教活動に狂信的とも言えるほどに情熱を傾けていました。植民地化された土地の人々のキリスト教化にかかわった17世紀前半のある宣教師はこうした活動を「魂の征服」と呼んでいます。魂の征服は植民地の全域で強力に推進されました。この結果、今日のラテンアメリカでは人里離れたさびれた田舎にさえも人目をひく教会が建てられ、地元の人々

から大切にされているのです。

魂を「征服」するわけですから、改宗事業は時には強権的に実行されました。しかしそれと同じくらい、宣教師たちが征服以前の土着の慣習や文化を尊重したり取り入れたりしながらキリスト教化が進められたこともありました。今日のラテンアメリカで目にする教会は基本的には石造りですが、一部の地域では木造が主流で、周囲の自然環境と調和しながらたたずんでいることがあります。また教会の壁に掘られたレリーフを注意深く見ると、本来は異教的な楽器であるマラカスを手にした天使が歌い踊っている様子が再現されていることにも気づきます。つまりラテンアメリカでは、地域独自のキリスト教文化が植民地期300年の間に育まれながら広く深く浸透し、今日に至るまで脈々と受け継がれているのです。

確かに、「魂の征服」の名のもとに半ば強引に導入されたキリスト教ではありましたが、今日のラテンアメリカで暮らす人々はこの宗教にかかわる伝統を大切に受け継いでいます。各種年中行事では聖人像が日本のお神輿のように担がれて町中をパレードしたり、ヨーロッパ起源のピアノやバイオリンを用いた様々な教会音楽が奏でられ、先住民系の人々を主体としたオーケストラ楽団が結成されたりもしています。植民地時代、軍事征服と共にもたらされたキリスト教は今日のラテンアメリカの人々の心に確かに息づいているのです。

19世紀の初め、ラテンアメリカ各地では独立運動が勃発し、宗主国との軍事衝突を経て多くの国民国家が誕生します。興味深いのは、こうした新生国家が国教に定めたのが他ならぬキリスト教だったのです。宗主国との血なまぐさい闘争の末に独立を勝ち取ったラテンアメリカの人々が選んだのが、植民地支配と共にもたらされたキリスト教であったというこの歴史的な事実は、ヨーロッパ伝来のキリスト教が植民地の300年を経てラテンアメリカの人々のアイデンティティの核となっていたことを示す確固たる証なのです。

(政治経済学部専任講師／南米キリスト教布教史)

旦敬介 DAN Keisuke

ブラジル帰還人の持ってきたもの

アフリカ大陸から奴隷としてブラジルに連れていかれた500万人ほどのうち、8000人程度が19世紀中に西アフリカに「帰還」したと見られています。彼らがブラジルからアフリカにもたらしたものの意味について報告します。

ブラジルからアフリカへの集団的な帰還は、まだ奴隷貿易がおこなわれていた1835年ごろから始まりました。この年、ブラジル史上最大の黒人反乱が起こり、これにかかわった疑いをかけられた自由人（解放奴隷）の一部が強制送還処分となったのです。これを機に、自発的なアフリカ帰還の動きも盛んになります。数十人が共同で船をチャーターするなどして、現ベナン共和国のポルト・ノヴォやウイダー、現ナイジェリアのラゴスなどに帰還していきます。1853年の段階ですでに、ラゴスには130家族以上のブラジル帰還人が住みついていました。ロドリゲス、ネヴィス、ダ・シルヴァ、ペレイラなど、多数のポルトガル姓が現在でもこの沿岸地域には残っています。

帰還人は数十年間のブラジル暮らしで身につけた、新しい技術や風習を持ってきましたが、単に新技術をもたらしただけでなく、新しい考え方や感受性をもたらしたという点で大きな意味をもったと私は考えています。

彼らがもたらしたものの中でもっとも目立つのは、ブラジル風の建築様式です。ダホメー王国時代の宮殿に見られるように、19世紀前半の西アフリカには、泥を固めた日干し煉瓦を建材とする窓のない平屋建ての建築物しか存在しませんでした。そこに、ブラジルで建築技師あるいは建築労働者として働いた経験のあった帰還人は、まったくちがった技術と様式をもちこみました。等間隔で配置された多数のアーチ型の窓や開口部、耐

久性のある焼き煉瓦の使用、それによって可能になった高層構造などがその特徴です。地元で富裕層を形成した彼らは自分たちの家をこの様式で建て、それは次第に地元民の間でも、富を象徴する憧れの様式として定着しました。この「アフロブラジル様式」のもっとも華麗な例は、帰還人の大立者ダ・ローシャが19世紀末のラゴスに建てた邸宅「ウォーター・ハウス」です。また、ポルト・ノヴォの中央モスクは、ムスリム系帰還人のパライーゾらが中心となって1930年代に完成させたもので、アーチ窓の並んだファサードの形状も、十字架形をしたその平面図も、カトリックの教会にそっくりである点で異彩を放っています(どちらも現存)。

ブラジル由来の祭礼や遊戯も残っています。今でもブラジルで盛んに祝われている祭にブンバ・メウ・ボイという牛の祭があります。あるいはその原型になったとされるブリーニャという驢馬の祭があります。この祭には2つの側面があります。ひとつは、暴れる張りぼての雄牛や驢馬から大人も子供も悲鳴を上げながら逃げまどって遊ぶという動物との関係を遊戯化した面です。もうひとつは、醜悪な老農園主とその若い美人妻の関係を、奴隷や使用人たちが愚弄して面白がる、という階級間の確執を演劇化した部分です。老農園主や妻は仮装で表現され、動物の張りぼてや、政治家等の風刺像や巨人像が加わる場合もあります。この両方の側面がベナンにもナイジェリアにも伝わって残っており、今でもその主催団体が複数あります。音楽と踊りも付随します。この祭が宗教的なものではなく、権力者によって組織されたものでもなく、民衆の世俗的なお楽しみである点が重要な特徴です。

建築に関しては、窓や装飾というコンセプトを持ちこんだところが画期的でした。生きる上で必要不可欠なものではないが、生活を快適にするものです。世俗的な遊戯や音楽も、生存に不可欠なものではないが、人生を楽しくするものではある。そのような「余計なもの」を愛好する新しい人生観、新しい感受性をもたらすことによって、ブラジル帰還人はアフリカの生のありようを変容させたのだと考えています。

所康弘 TOKORO Yasuhiro

トランプ政権下の揺れるメキシコ

「北の巨人」アメリカで、自国中心主義的なトランプ政権が誕生しました。このことは何を意味するのでしょうか。とりわけ国境を接した隣国メキシコにとって、トランプ氏の主張はどう理解すればよいのでしょうか。アメリカ、カナダ、メキシコの3カ国が加盟する北米自由貿易協定（NAFTA）の再交渉、「国境の壁」の建設、ヒスパニック移民への攻撃…etc。かつてメキシコ大統領ポルフィリオ・ディアスは「あわれなメキシコよ、アメリカにあまりに近く、神からあまりに遠い」と嘆きました。現在は、どうなのでしょう。ここでは2つの論点をとりあげてみましょう。

第1に、NAFTA再交渉のゆくえんについてです。トランプ氏は、ことあるごとに「NAFTAは史上最悪の貿易取引」と非難してきました。当初は「国境税を課す」といった強硬論もありました。現時点での再交渉のキーワードは、「協定の近代化」です。NAFTAは1994年に発効した協定で、時代とともに進化した電子商取引などへの対応が遅れており、こうした部分のバージョンアップを図ることが目指されています。また、メキシコの「低賃金」や「労働問題」も議論の俎上にあげられています。アメリカやカナダ側は、メキシコの賃金が安すぎるがゆえに、国内雇用がメキシコに奪われているという考えです。メキシコの賃金問題に触れることが、今後どのような結果を招くのか、その判断は難しいところです。

ここで再交渉の所期の目的を考えてみましょう。それはメキシコ相手に拡大するアメリカ側の貿易赤字を減らしたいということでした。知られるように、NAFTA発効によって多くのアメリカ企業はメキシコに進出しました。ゆえにメキシコで生産したモノが本国に流入するという構図は、アメリカ企業自身が主導してきたといえます。その構図を変えてしまうと（例えばメキシコに対して「国境税」を課すと）、アメリカ企業や同国の消費者にも、その影響が跳ね返ってきます。こうした中、原産地規則の変更も議論されていますが、これによって対メキシコ貿易赤字の削

減がどこまで実現できるかは、不透明です。

第2に、「トランプの壁」についてです。トランプ公約の目玉の一つは、メキシコからの移民流入を防ぐために「国境の壁」を建設し、その費用を同国に支払わせるというものでした。

ここで事実関係を確認したいとおもいます。アメリカへのメキシコ移民は、流入数それ自体は2000年半ばから急減しています。むしろ現在は、強制送還や国境警備の強化、リーマン・ショック後の景気低迷などを背景に、アメリカからメキシコへの移民流出(本国への帰国)の傾向が強まっています。また、中米5カ国(＋ドミニカ共和国)とアメリカが締結した中米自由貿易協定(CAFTA)によって、いまやニカラグア、ホンジュラス、エルサルバドルなどの中米諸国からの不法移民がアメリカへ大量流入しています。その数はメキシコ人移民よりも圧倒的に多いです。中米からの移民には、CAFTA発効以降、アメリカから安価な農産物流入によって廃業・離農に追い込まれ、やむを得ず不法移民となった農民・貧農たちの数も少なくありません。

もし「国境の壁」建設費をメキシコに支払わせることになると、その含意は、中米諸国からの(アメリカ側の)移民対策コストを、メキシコ側へ押し付けるということになります。

最後に強調したいことは、アメリカ各産業部門の労働者人口に占める、人種別の構成比率についてです。じつはヒスパニック系移民は、他の人種(白人系、黒人やアジア系)があまり従事していない農業や建設業などの肉体的労働業種、および単純・低賃金業種である飲食・宿泊業での就業比率が高くなっています。そのため、「移民のせいで雇用が奪われた」という言説にかんしては、慎重な検証が必要になるでしょう。

ちなみにメキシコ側から見れば、アメリカからの移民送金が同国経常収支の改善に与えている影響は近年、大きいです。また、移民送金は同国の貧困世帯の家計収入の増加と貧困緩和に一定の役割を果たしてきました。仮にアメリカで反移民政策が強化されるようなことが今後あれば、メキシコ経済社会にはネガティブな影響も出かねないでしょう。

(商学部准教授／ラテンアメリカ経済)

中林真理子 NAKABAYASHI Mariko

日本ラテンアメリカ異文化学生交流

明治大学にはラテンアメリカ地域を研究対象とする研究者が多数存在し、また同地域を対象とした教育研究活動もさまざまな部局で行われてきています。これらを集結し、明治大学の国際化におけるラテンアメリカ地域での教育研究活動をさらに発展させるために、2017年に「明治大学ラテンアメリカプロジェクト」が始動しました。同プロジェクトは、グローバル人材教育プログラム、産学連携プログラム、学術プログラムに大別されますが、「ラテンアメリカ異文化交流プログラム」はグローバル人材教育プログラムの一つで、2009年から商学部を中心に実践されています。本稿ではこのプログラムについて簡単に紹介し、さらにこれまでの活動から得られた知見を示し、日系社会を中心とした親日的なネットワークとのかかわりについて述べていきます。

ラテンアメリカ異文化交流プログラムでは、ラテンアメリカ地域の明治大学の協定校と、ビデオカンファレンスとフィールドトリップによる相互訪問を中心とした学生交流を行い、将来日本とラテンアメリカの国際的なネットワーク構築に貢献する人材を育成するための活動を行っています。日本とラテンアメリカ地域は、地理的には地球上最も遠く、文化の上でも大きな隔りがあると捉えられるのが一般的です。しかし同時に、世界最大の日系社会が存在する同地域には親日的な風土があり、パートナーとして重要な存在であることも確かです。そこでまずはお互いの距離を埋めることを目指したリアルタイムのコミュニケーションとして、テレビ会議システムを用いた学生間のビデオカンファレンスやSNSを最大限活用しています。2009年以来アルゼンチン、ブラジル、コロンビアの協定大学・教育機関と計38回のカンファレンスを行いました。

この際の使用言語は基本的に英語で、相手が日本語を勉強している学生の場合には日本語での実施となりました。時差も季節も全く逆の状況でお互いに調整を図ってカンファレンスを実現させること自体が、異文化理解の始まりと考えています。

そして2011年以来、これらの協定校等との間では、日本とラテンアメリカ地域それぞれへの企業やNGO訪問を含む2～3週間程度のフィールドトリップを毎年実施してきました。日本からのフィールドトリップは夏季休暇中に実施しています。ラテンアメリカ地域への経由地を米国ワシントンDCとし、国際機関への訪問とスペシャリストとの交流によりラテンアメリカへの理解を深めた上で同地域に入り、協定校でのジョイントクラスや企業等への訪問を行います。さらに2年に一度のCOPANI（汎米日系人大会）開催年には、大会に参加しプレゼンテーションも行います。これによりさまざまな日系人と実際に交流する機会を得て、コロンビア社会の現状や、世代間のギャップといった日系社会が抱える問題を知ることできます。また、日本へのフィールドトリップは秋に実施しています。春からのビデオカンファレンスと夏のフィールドトリップを通じて交流してきた協定校の学生が来日します。ジョイントクラスや企業訪問等でのアテンドを通じて、明治大学学生は日本に居ながら海外体験学習と同様の異文化体験ができるというメリットもあります。

日本の学生はラテンアメリカの学生たちとの交流が始まると、相手の日本への関心の高さに驚き、自身がラテンアメリカはもちろん日本そのものに対する知識が乏しいことを感じ、また多様なルーツを持つラテンアメリカの学生と接することで、自身のアイデンティティについて考えるきっかけとなっているようです。そしてこれまでの活動に際して、常に日系社会の存在を根底に感じてきました。日系社会そのものの多様性を知るとともに、近年はクールジャパンを入り口に非日系人を含む親日ネットワークが発展していることを実感し、このような動きの中で日本の大学としてできる貢献とは何か模索しながら活動しています。

(商学部教授／ラテンアメリカとの大学連携)

舩方周一郎 MASUKATA Shuichiro

気候変動交渉とラテンアメリカの多様性

近年のラテンアメリカは、開発途上国の中でも一定程度の民主主義の定着、経済発展、経済社会格差の是正を実現した地域です。その一方で、化石燃料に依存した資源開発や森林伐採などで温室効果ガスを大量に排出しています。インフラ整備の遅れなどで、早魃や災害など地球温暖化が原因とされる気候変動の脅威にも高い脆弱性をもっています。この気候変動の脅威を前に、国際的なルールと対策を決める気候変動交渉では、ラテンアメリカ諸国が関与する同盟の多様な役割に注目が集まっています。

第1が、気候変動交渉を推進するブラジルも加盟するBASICです。BASICは、2009年コペンハーゲン会議の開催直前にブラジル、南アフリカ、インド、中国の間で結成されました。この4か国は市場経済を志向し、世界の主要な温室効果ガス排出量を占める新興諸国であることから、気候変動交渉における第3極となっています。BASICの中でも、ブラジルは1992年のリオサミットを主催して以来、ラテンアメリカという地域枠組みを超えて、先進国と途上国の利害を調整する国際的な役割を担ってきました。ブラジルは、国内の環境運動の強さから交渉の現場でも、政府・企業・NGOが相互に協働する気候変動政策ネットワークを構築しています。

第2が、気候変動交渉に抵抗するALBA（米州ボリバル同盟）です。ALBAは、ボリビア、ベネズエラ、エクアドルなど、ラテンアメリカの急進左派と評される国々により結成されています。反米・反市場経済を標榜する同盟として知られるALBAは、ボリビアのコチャンバンバで開催された会合で、アンデスの先住民に信仰されてきた母なる大地（パチャママ）への尊厳を主張すると、気候変動対策でも先住民の権利保護や、新自由主義に基づいた環境クレジットの売買を批判するなど、気候変動交渉での気

候正義の推進を訴えてきました。ALBAの外交姿勢は、国際協調を求める多国間交渉の中では厄介者として扱われています。しかし、その行動の背景には国内の草の根の社会運動との連携があります。ALBA諸国の多くは、主に先住民団体を政府派遣団に加えて、要求が多国間交渉の舞台でも反映されるように配慮してきたことがあります。その要求は画一化が進む社会で文化的多様性を守る市民の願いでもあるのです。

推進派と抵抗派とも異なる道を模索するのが、第3のAILAC（ラテンアメリカ・カリブ独立連合）です。AILACは、チリ、パナマ、ペルー、コスタリカ、グアテマラ、ホンジュラス、パラグアイなどが加盟しています。AILACは、域内で環境クレジットの売買や、水力・風力・太陽光発電といった代替エネルギーへの転換を加速させることを目的に、経済的な利益を前提としたグリーン経済を志向しています。各国間で相違はあるものの、ラ米諸国間の共同政策と意思統一を目指すAILACは、政治経済規模や先進国と途上国のほぼ中間に位置するラテンアメリカ諸国間の同盟ということから、主に先進国・新興国・途上国の対立構図からとらえられる気候変動交渉の中で、交渉の仲介や政策立案において核となりうると評価されています。

しかし現在の気候変動交渉からは、アメリカのパリ協定の離脱からもわかる通り「こうあるべき」という規範に訴えるだけでは、既存の構造を変えることはできないことが浮き彫りになっています。化石燃料に依存する社会から持続可能な社会の実現にむけて、産業構造の転換を迫る決意を込めた気候変動対策には、現実の経済社会の認識とはまだ大きな乖離があるためです。ではどうすれば、産業界や市民に環境を守ることが利益になるよう誘引する制度をつくることができるのでしょうか。経済のグローバル化が加速する中で、経済発展と環境保護の両立を目指して気候変動対策の叡智を実践に方向づけるには、経済的利益以外の精神的な豊かさ（幸福）と、自分と異なる他者の存在を認める多人種・多文化社会を醸成してきたラテンアメリカ諸国の創造力と挑戦が不可欠となっています。

【編集後記】

明治大学には、ラテンアメリカ諸国にかかわる多様な分野を専門として教育・研究活動をしている教員が20名以上いますが、所属学部の枠を超えて一堂に会する機会はなかなかありませんでした。去る11月23日、明治大学駿河台キャンパスで開催された「アカデミック・フェス2017」において、且敬介と中林真理子をコーディネーターとする「ラテンアメリカ・フォーラム」と題するセッションをもつことができたのは、われわれにとっても貴重なできごとでした。ここでの発表者6名に加え、関連分野で仕事をしている3名、計9名のささやかな文章をまとめたものが本冊子です。編集担当は管啓次郎（理工学研究科総合芸術系＝PAC「場所、芸術、意識」プログラム）、デザインは谷口岳（総合芸術系博士前期課程）。お楽しみいただければ幸いです。

「明治大学ラテンアメリカ研究ノート」

2017年12月21日 発行

発行者 明治大学理工学研究科建築・都市学専攻 総合芸術系 管啓次郎

発行所 214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1

明治大学理工学部 批評理論研究室

非売品 1,200部発行